

戦時中の体験を聞く会

共催：東松山市

語り手 ^{あさの}浅野 ^{たかし}卓 さん

演題『満州での体験』

【プロフィール】

1934（昭和9）年 大連市生まれ。

1946（昭和21）年 舞鶴港に引き揚げ、日本での生活が始まる。

北本市の小中学校で講演を始めて以降、現在でも北本市などで「戦争体験を伝える語り部」として自身の体験を語る活動を精力的に実施しています。

体験を聞く会の様子



【お話の内容】

父親が南満州鉄道に勤務していたため、旧満州大連市で生まれました。1941（昭和16）年に尋常小学校に入学しましたが、12月に太平洋戦争が勃発したため、学校では午前は授業、午後は畑仕事などの勤労奉仕でした。4年生のときには、銃剣術の訓練もしました。

日本人と中国人の住む場所は区別されていましたが、1945（昭和20）年に家族4人で屋根のない列車に乗り、着の身着のまま牡丹江市を離れました。列車が吉林を通過中、玉音放送を聞いて、敗戦を知りました。

駅に停車中、中国人が数名列車に乗り込み、若い日本人女性を何人か連れ去るのを見ました。

列車が着いた先は、炭鉱の町である撫順市で、ここでどん底の生活が約1年続きました。

撫順市では、満州鉄道のアパートに住むことができましたが、まもなくして日本兵が中国人に追われて山奥に逃げ込みました。アパートの前には開拓団の人達が住んでいた陸軍兵舎がありましたが、生活が厳しく病死や凍死、栄養失調などで毎日のように死者が出て、裏山の穴に運んでいました。すぐに穴がいっぱいになったため、穴に入りきれない死体は、そこら中に放置され、犬やカラスの餌食となっていました。生活のために、少しでも母親の役になるように、炭鉱露天掘りへコークスを集めに弟と出かけました。集めたコークスを母親が売って、生活費に充てていました。また、アパートの前にあった倉庫に弟と入り、小麦粉をリュックに詰めて持ち帰っていました。

ある日、倉庫に入っていたら、突然扉が開き、外国兵が銃を構え、中に誰かいないか調べていました。私と弟は驚いて、声も出せず、動くこともできず、震えていました。

行方が分からなくなっていた父親がアパートに現れて、家族は驚きましたが、父親の人相が変わり、なかなか近寄れませんでした。

避難中は、学校には行かず、勉強もほとんどしませんでした。生きるために子供でも働いていました。

そして、1946（昭和21）年に、中国の葫蘆島の港から大型船に乗り、京都の舞鶴港を目指しました。約1か月の船旅では、保存室や防腐施設がないため、乗船中に病死した子供を海中へ流す母親の姿や場面を見てきました。舞鶴港に到着したとき、初めて日本を見ました。

その後、父親の実家がある赤羽で新しい生活が始まりました。

残酷で悲惨な戦争は二度と繰り返してはなりません。誰もが自由に意見を言える社会が大切だと思います。